

特集 ● どうする、どうなる、大学図書館
住民利用・電子化をめくって

著者 橋爪大三郎

聞き手 ● 沢辺均 構成 ● 榎田崇

私が 図書館に望む こと

知識というものは公共のものであり、その時代の
共通知識を次の世代に伝えていくことが、あらたな知や文化の
創造につながる。だからこそ、知識を伝える役割になう大学は、
すべての人に開かれていく必要がある、という考えを橋爪大三郎さんに、
大学図書館に望むこと、できることなど、じっくりときいた。

図書館には 戦略が不可欠

図書館とは、本が集まったもので
す。ですから図書館は、そこに収蔵
している図書、データの構造に本質

おこう、そういう動機を持って組織
的に本を集めようと考えたときに、
図書館が生まれるわけです。

図書館には必ず、戦略があるんで
す。これが個人の蔵書などとは違う
点です。

個々の蔵書は、自分の興味にあ
わせて自分の資力の範囲内で買い集
めるものです。だから、その人が死
んでしまうと、捨てたり、友達にあ
げたり、古本屋に売ったりして散逸
してしまうんですね。こういう個人
の蔵書の性格を越えて、みんなで利
用するという共同性を持って戦略的
に図書を集める。たとえば、市とか
国とか、大学といった公的機関が本
を集める。こうした条件が揃ったと
きに、図書館と言えらると思います。
そこでは、個々人が利用するんでき
ども、その個々人が利用するとい
うことを越えた大きな戦略がある。
文化の創造に向けて、過去の創造の
成果をなくしてしまわないために、
将来の創造に活かしていくために残
していくという、公共的使命がある
んですね。ここにまず注意すべきで、
これが図書館の精神なのです。
そうすると実は矛盾も起こってき
ます。
たとえば図書館は、将来にいろん

的に依存していると言えます。

そこでもまず、図書について考えて
みましょう。これは、言葉(言語デー
タ)を書き記したものの、という基本
的な性質があります。なぜ書き記すの
かと言うと、それは、時間を飛び越

なデータを残しておかなければいけ
ない。確実に残しておくのなら、貸
出しなんかしない方がいい。これが
一番確実に残しておける。貸出しを
すれば必ず欠本がでます。破損本が
でます。ところが、一切貸出しをし
なかつたら、何のためにとってある
のかまったく分からない。だからこ
こで、適切ぎりぎりな公開の度合い
を決めておかなければいけない。貴
重な図書だったら閉架にするとか、
一般図書だったら何冊も置いてお
き、多少はポロポロになつてもいい
やとか、きちんと度合いをつけるべ
きなんです。

これは美術館でも同じことが言え
ます。貴重な美術品を完全に保存し
ておこうと思つたら、光を当てない
で、鍵をかけて、完全な空調が保た
れたところにしまっておくのがいい。
人間に観せないのが一番いいん
です。だけど、それでは美術館の意
味がない。税金を払って、収蔵作品
を観られないなんておかしいと、み
んな思うでしょ。観ると傷むとい
うことが確かにあるわけですが、こ
れも兼ね合いの問題なのです。
戦略がはつきりしていれば、何を
とっておくか、どういう本を買つて、
どういう本を買わないか、という蔵

えるためです。本の特徴は、書かれ
た時点と読まれる時点の間に時間的
な差があるということ。もちろん、
空間的な差があつてもいい。書いた
人と読んだ人が別の国の人だとか、
国境をまたいだりしても別にかまわ

書構成についての方針が立ちます。
こういう戦略を持つてない図書館
は、図書館の名に値しないですね。
日本には残念ながら、そういう図書
館が結構あります。次々と本を買つ
て、収蔵スペースがなくなつたと
言つては古い本から順番に捨ててし
まう。

それから、図書には検索が大切で
すから、図書を分類して、配架して
利用しやすいようにする。つまり、
司書業務が非常に重要なんです。図
書館には、本の購入費の他に、運営
費や司書の費用があるんです。す
わが国の予算では、それは人件費だ
とか何とか言つて、別系統になつて
いて、物件費と人件費を対応させて
いないところが多い。図書予算が足
りないと言つて、人件費を削つて本
をたくさん買つてしまつたりする
ところがある始末です。この比率が壊
れるとどうなるかと言つと、図書が
積読になるんですね。それでは戦略
が実行出来ません。

もうひとつ図書館は、利用のこ
とを考えると、一時間とか二時間で行
ける場所がないと意味がない。日帰
りで行けないような場所に図書館が
あつても、普通の人はなかなか利用
できない。あつちこつちにないとだ

はしづめ・だいざぶろう ●
一九四八年、神奈川県に生まれる。
東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。
現在、東京工業大学大学院
社会学研究科教授(社会学)。
著書に「橋爪大三郎の社会学講義2」
「言語ゲームと社会学論」(以上、夏目書房)
「現代思想はいま何を考えればよいか」
(以上、勁草書房)、「はじめの構造主義」
「社会がわかる本」(以上、講談社)。
「民主主義は最高の政治制度である」
(現代書館)、「性愛論」(岩波書店)。
「大問題1」(幻冬舎)、「共著として」
「自分を活かす思想」(社会を生きる思想)。
「ゴーマニズム思想講座 正義・戦争・国家論」
(以上、後書房)、「オウムと近代国家」(南風社)。
「僕の憲法草案」(ポット出版)、「研究開国」(富士通ブックス)などがある。

ないんですが、本質は時間だと思
います。もし時間ということがなけ
れば、本は書かれないでしょう。書か
れたとしても同時代で消費してし
まつていいわけです。そうではなし
に、将来のありうべき読者に残して

めです。あつちこつちにあるとい
うことは、重複が生じるということ
です。ただし、あまり重複しても困
るので、図書館同士分業しないとい
けない。こういうことも戦略の一環
です。たとえば、世田谷区の図書館
の場合、区内の図書館の間では、お互
いにデータのやりとりをしてコー
ディネートをしている。私が住んで
いるところは、目黒区、大田区にも
近いのだけれど残念ながら、世田
谷区の図書館では、大田区や目黒区は
知りませんよ、と言われる。そこま
での分業はしていないのです。本
来は、すべての図書館が棲み分けな
がらリンクして、さまざまの需
要に応えていくというのが望ましい
あり方です。

図書館には戦略が不可欠なん
ですけども、現状はその戦略を十分
に発揮していると言ひ難いのではない
か。

大学図書館こそ 知的活動の中心である

図書館を誰がつくつたかと言
うと、文化・知識に対して非常に関心
があつて、それが自分の権力の基盤
になつてると考えている、資金の

ある人。具体的に言うと、王様。それから、大学ですね。

王様の方から話をすると、古文書や外交文書、土地の相続に関する書類、裁判の記録といった証拠の書類を、あとから文句を言う人間が出てくるといけないのでとっておきます。それらを保管しておく公文書館みたいなものが出来ましたが、ついでに本も取っておく。こういうスタイルの図書館だったらどの国にも必ずあつたはずですが、でも、もっぱら学術書を収蔵しているという、どこからみても図書館らしい図書館は、古代にあつたアレキサンドリアの図書館を除くとすれば、ハーバード大学の図書館のスタイルじゃないかと思ひます。

ハーバード大学。私は行ったことないんですが、インターネットで覗いたり、うわさ話でいろいろ聞くに、図書館が大学の中で一番立派なのですね。図書館を中心にしていろいろな建物が増えて、大学が出来ている。ハーバード大学はご存じのよう

違うわけです。教科書でさえも公共のものであつたとしたら、他の参考書なども全部図書館にあるでしょ。そういうシステムで小学校・中学校・高校も出来上がっている。もちろん、大学も同じです。

大学図書館は、一般の図書館と少し性格が違ふんですが、それは大学という場所の性質によります。大学は大きく言うと、教育と研究を行なう組織です。教育と研究という大目的がありますから、その教育・研究に役立つ書物をきちんと揃えているべきものなんです。

とすると、大学図書館は他の図書館と違って、まず教科書を揃えているべきです。アメリカでは、一般の図書館でもしばしば教科書を何冊も揃えています。大学図書館になると、教科書を五〇冊とか一〇〇冊とか持つていて、新学期がくると学生全員に貸出します。こういう機能を持つています。日本にはこういう機能はないですね。みんな新学期になると買わなくちゃならない。

次に、論文、雑誌論文を揃えていること。雑誌は毎号揃っていないと意味がありませんから、雑誌を継続的に購読していることが大事なことです。創刊してから、三十年、五

に、神学部から始まつた学校です。神学にはどうして本があるかと言うと、アメリカは一応新教を中心に成り立つた国だから、当然のことながらカトリックとの論争をいつも念頭に置いてるわけです。二十世紀でこそ、アメリカとソ連の冷戦が念頭に置かれていたんですが、本当の冷戦というか、対立は、カトリックとプロテスタントとの間で十六世紀からずっと続いている。宗教戦争もあつて、その後冷戦状態になつたわけですが、つまり潜在的に論争しているんです。だから論争に勝てないとアメリカは壊れちゃう。そこで、論争のネタになりそうな本は全部残しておき、それを若い学生に勉強させて論争に強い牧師になつてもらひ、アメリカ中の教会に散らばつてもらひ。そして日曜日ごとにちゃんとプロテスタントの説教をする。そうやって神学のレベルをいつもいつもブラッシュアップしていかないと、アメリカの公徳心・道徳心・人格というのは壊れてしまふんです。ひいてはア

メリカが壊れてしまふ。そこで、ハーバード大学は、私立大学ではありませんが、とても重要な位置を持つていたと思うのです。出版事情の悪いアメリカですから、本は貴重です。本があつたら個人個人で買つたり、散逸させたりしないで、できるだけ図書館に集めよう、ということではハーバード大学の図書館があり、他の大学の図書館がある。市や町や村や州でも必ず立派な図書館をつくる。優れた本は図書館に集中して、次の世代に残していくという意識が極めてはつきりしています。たとえば、教科書をどうしようかというふうなことも、日本とアメリカとは違ふ。アメリカの学校の原則は、本は公共のもので、教科書も学校のものなんです。学生は学期の始まりに、ハードカバーの厚い教科書をボンと借りてくるわけ。家に持つて帰つてなくしたりするといけないから、原則はロッカーに置いておき、宿題があるときだけ家に持つて帰るんです。

十年、百年経つた雑誌はさらです。それが欠号なく全部揃つていて、うことがとても大事なことです。もし個人で集めたら、興味があつたときから買ひ始めても、十年、二十年で途切れてしまひます。ですからこれは、図書館などが公的に集めなければなりません。また、みんなが買わなくても図書館にひと揃ひあればいいわけです。資源の節約にもなりますよ。

それから一般の書物では、ある分野に関して基本的な書物が全部揃つていてというのが大変重要です。どの書物が基本的かということは、司書やその専門分野に詳しい人にアドバイスを受けて分かつていなければなりません。理科系は日進月歩であるために、過去五年ぐらいまでが勝負なんですけど、人文系の場合はどこまでさかのぼつても創造の源泉として重要ですから、およそ本と名前の付くものは全部収蔵していることが望ましい。そういう違いがあります。

極端な話、ある本を収蔵するかどうかを決めるのは、将来それを使う人がいるかどうかです。誰かたつた一人でもいれば、そのたつた一人のために本を買ふべきなんです。い

メリカが壊れてしまふ。

そこで、ハーバード大学は、私立大学ではありませんが、とても重要な位置を持つていたと思うのです。出版事情の悪いアメリカですから、本は貴重です。本があつたら個人個人で買つたり、散逸させたりしないで、できるだけ図書館に集めよう、ということではハーバード大学の図書館があり、他の大学の図書館がある。市や町や村や州でも必ず立派な図書館をつくる。優れた本は図書館に集中して、次の世代に残していくという意識が極めてはつきりしています。たとえば、教科書をどうしようかというふうなことも、日本とアメリカとは違ふ。アメリカの学校の原則は、本は公共のもので、教科書も学校のものなんです。学生は学期の始まりに、ハードカバーの厚い教科書をボンと借りてくるわけ。家に持つて帰つてなくしたりするといけないから、原則はロッカーに置いておき、宿題があるときだけ家に持つて帰るんです。

わが国の場合は、教科書は自分で買うものですよ。そのかわり、べらべらで安い。内容が精選されていて、検定済みだったりなんかして、落書き、書き込みはしほうだいで、教科書の扱いからしてこのように

中て五〇〇冊や一〇〇〇冊も売ればよいような、およそ一般の人が滅多に触りもしないような本が、その図書館に全部揃つていた。まるで彼に、論文を書いて下さいと言わんばかりの蔵書構成だったから、何の不足もなく博士論文を書くことが出来たわけですよ。

大きな大学の大学図書館は、こういう機能を持つていてるんですよ。ある分野の専門論文を書くのに必要にして十分な蔵書構成がある、これが基本です。大学というのは、卒業論文を書き、修士論文を書き、博士論文を書く。その道の専門家が知的な創作活動をするんだから、それに必要で十分じゃなきゃダメですね。

戦略を持つて本を買つたために

ところで、わが国の大学図書館の悪しき特徴は、図書の購入予算が大学図書館の予算だけで出来ていないことです。図書を購入する権限が誰にあるかと言うと、普通の図書館であれば蔵書構成の委員会があつて、どういう雑誌を取るか、本を買つかを、そこで決めていきます。権限が一

本化されてるわけです。

大学図書館の場合、研究費を持つている大学教員は、研究費で図書を買うことが出来る。めいめいがお互い連絡なく勝手に買ってしまふ。それをどうやって管理するかと言うと、原則として図書館に登録する。国立大学ですと、予算は税金ですから、本は国有財産になってしまふ。登録番号が与えられ、カードが出来て、図書館の蔵書になってしまふんです。ただし、その先生が現役で活動している間は、先生の研究室にその本がある。その先生がいなくなったり、死んじゃったりすると、その図書を中央図書館に返却する。こういった構造になっています。そうすると図書館にとっては、こんな本はなくていいと思うような本が、あつちこつちで重複して買われたりします。図書の購入費用には人件費はついてないので、図書館の方はオーバークになりまふ。

ですから、研究費と図書費は切り離すべきです。教員が買う本につい

ては消耗品扱いとし、教員の使い捨てにしないでください。教員が買った本を図書館がいろいろ管理するなんて、ばかばかしいことはやめた方がいい。そのかわり、組織的に本を買いたいのであれば予算を増やすべきですね。図書館からみれば、教員が個別に買う本なんて、雑音、ごみのようなものなのです。たとえば、おとうさんが書斎を準備しようと思つても、こどもが漫画の本を買つたり、おねえさんが映画の本を買つたりして、場所をとるし、俺はこんな本読みたくないのとか、そういう苛立ちつてあるでしょ。図書館も、たぶん同じように感じているはず。複数の意思決定主体があるということ、戦略的じゃないわけ。教員も、登録されちゃうから大事な本は一冊も買えない。素晴らしい本なんか買つても、転任となつたら置いていかなきゃいけない。だからゴミみたいな本しか買えない。だれにとつても非常に不幸なことだね。

日本の大学図書館は、このように、中央図書館と研究室の二つの部分から出来ていて、図書館として統一的に機能していません。東大の例で言うと、中央の図書館の他に、学部ごとに図書館があります。学部の中には立派に運営されている例もいくつかあります。まず医学図書館、これは単独の図書館で、とても立派です。それから経済学部の図書館。経済学部は中の組織がきつちりしているの、図書館も立派です。経済学の古い雑誌が何でも揃っています。工学部や理学部の図書館については、私はよく知りませんが、他はあまりほめられないですね。文学部図書館というのが存在することになってますけれど、これは形ばかり。入るとちよぼちよぼと雑誌があるだけで、実態はその下の研究室がその機能を担つてるんですね。哲学・美学・インド哲学・ドイツ文学・フランス文学・社会学・心理学などの研究室がお互いに関係なく蔵書を持つている。専門の司書は置けないので助手か、人

件費を捻出して囑託の人が管理している。だからバラバラです。欠本も多い。昔に買った本なんか、五分の一もあればいい方で、残りはみんな行方不明になってしまつています。これが大学図書館というものなんです。経理の点でも、管理の点でも、大変にバラバラ。

もし大学の知的活動の中心が図書館であるとすれば、ハーバード大学のように大学の真ん中にどんとあるべきです。まず何はなくとも図書館だけはあつて、これが正しい姿です。大学の学生はいなくても知的活動は維持できる。教員はいなくても知的活動は維持できる。学科や研究室はなくても図書館さえあれば、知的活動は維持できる。図書館がなかったら他に何があつてもダメだ、という関係なのだと思ふんです。だから予算や建物は図書館が最初に全部取つておいて、残つた中で他がやりくりをすればいいんです。これが出来ている大学は、日本にはないと思ふますね。図書館は学部扱いされていな

いし、大事な会議に、図書館の代表は出席しない。そういう意味で、大変冷遇されているように思ひます。

ところで、大学図書館と言つてもいろいろあります。それは、大学と言つてもいろいろあるのと同じです。大学にも、一学年五〇人とか一〇〇人で、全校生徒五〇〇人という大学もあります。短期大学や、専門学校もちっちゃいですね。そういうところで立派な図書館と言つたつてなかなか無理でしょ。

日本の大学設置基準では、学生数にあわせて蔵書が何万冊ないと大学の認可が下りないことになってるんです。で、どうなるかと言うと、大学の認可を得るために蔵書を提供する古本屋さんがあるんですね。「新設の大学をつくるんですけども、三万冊ほど蔵書をお願いできませんか」つて注文すると、「はいはい、承知しました」と、ぼーんと持つてきてくれるんですよ。冊数さえ揃えばいいわけ、中身なんか問いません。たとえば経済学の本なんか一番明瞭ですけれど、箸にも棒にもかからないクズみたいな本がごまんとあります。一方、絶対にないといけない貴重な本つていうのもあつて、本のランキングが非常につきりしているんで

す。だから三万冊揃つていようとゴミみたいな本ばかりだつたら、大学でも何でもないわけ。基本的な本が並んでなくちゃいけないんだね。そういうことを古本屋さんが必ずしも分かつているわけじゃないし、大学設置基準にそんなこと書いてありませんから、こういう愚かなことが起こるんですね。

すべての大学図書館が、横綱のようになんと構え、教育・研究なんでも、どの分野でもかかつてこいみたいにしるとは、私は言いません。でも、いくつかの有力総合大学や地方の核になる大学は、そういう機能を目標したらいいんじゃないかと思ひます。

同時に、その地域に他にどんな図書館があるのかによつて、蔵書内容も変わつてくると思ひます。東京だつたら、国会図書館もあるし、都立の図書館もあるし、地域の図書館もあるから、大学の図書館の蔵書がある程度偏つていたり、いい加減だつたりしても何とかなります。しかし地方の都市などで、ここにしか大規模図書館がないなんて場合には、他の図書館とよく相談して蔵書構成を分担するべきですね。そうやって、総合大学・単科大学・専門学

校・地域図書館が、それぞれの蔵書構成を分岐させて、特徴を出すべきです。

率直に言つて、研究なんかほとんどしていない大学もあります。そういう大学は、おもいきつて教育に特化して、公立の図書館に毛がはえたもので我慢するというのも一つの方法です。それだつたら、『地球の歩き方』だとか『時刻表』とか、そういうものを完備していた方がいいかもしれません。

図書館には相互貸借というシステムがあります。本の所在が分かれば、図書館相互で本の貸し借りをしてくれまふ。言い換えると、すべての図書館は理想的には、一個の図書館だということなんです。私が経験したのは、東大の中の相互貸借です。たとえば私が入類学の論文を書くとき、人類学科は非常に複雑になっていて、その当時は駒場にありました。ところが大学院だけは、本郷にあつて、そこに人類学の図書室というのがある。ところがその人類学科は理学部の人類学科から分離したので、戦前の蔵書は全部本郷の理学部にあつて、たとえば、一九四五年までは理学部にあつて、四五年から六〇年

は駒場にあつて、その後は本郷にあるといった具合です。

理学部の研究室にあるものを借りたくても、他学部生には貸出しをしていないんです。そこでどうするかというと、文学部の図書館から理学部の図書館に向けて相互貸借の申し込みに行くんです。文学部の図書館のカウンターに行くと、相互貸借の申込書があるので、そこに必要な本の名前を書くわけです。それを持って理学部に行つて、本を借りてきて必要なところをコピーします。そして返しに行く。一つの論文をコピーするために、だいたい一時間から一時間半ぐらいかかるんですね。もし論文を五つ、六つ読もうなんて思つたら、まず必要な論文の所在や閲覧の形式を調べて、必要ならその相互貸借の書式を書いて、借りに行つて、コピーして、返しに行く。これはもう一日仕事です。

経済学部は相互貸借じゃなくて、すぐ貸してくれました。法学部は相互貸借すら受け付けてくれませんので、法学部の知り合いに頼んでこつそり靴の中に入れて持ち出してもらつた。文学部は、研究室ごとにお互いに独立しているのでケース・バイ・ケースです。このように、図書館の

案内に、貸出し不可と印刷してあつても、実際は違つたりということが結構あるのです。東大の中だけでこれだけ複雑ですから、もしこれが別の図書館との関係となるともっと大変です。

ただ最近では、何という雑誌の何巻何号の何ページから何ページまでコピーして送って下さいと言うと、コピーを無料でやってくれるようになりまし。相互貸借じゃなくて、コピーのサービスもやってくれる。とても便利になっています。ただし現物がみられないから、必要ない論文までコピーしてしまふことがあります。また、実際に手に取つてみるものが出来れば、次のページにもついで論文があつたりと、発見があるんですよ。コピーサービスではそれが全然ありません。それに、やつぱり原文をみられるのが一番いい、というわけで総合大学は、可能なら開架式の大きな図書館があつて、本人がコピーできるのが理想です。

電子化によるバーチャル図書館の可能性

図書館の役割の中心は文字情報を次の世代に伝えるということですが、いま、その伝え方が大きく変わつてつあります。

雑誌は合本して、製本してあるでしょう。これは、コピーをとるという事を前提にしていけないんですよ。一年で十二号まで出るとすると、四冊分ずつぐらい製本してしまふ。製本すると一冊で立つようになりまして、保存性もよくなりますが、コピーはとりにくくなる。真ん中まできれいにコピーをとろうと、いろいろな人が自分のとりたいページを開いてギョッと押すから、糸目が切れて、本はすぐにボロボロになってしまふ。昔はマイクロフィルムに撮つたことがあつたんですけども、マイクロフィルムは閲覧の方法としてあまり適当でない。そのままマイクロフィルムリーダーで読むと目が痛くなるので、とても読み続けられない

んです。しかもハードコピーでないからメモもできないし、勉強の道具としてあまり役に立たない。マイクロフィルムリーダーからコピーをとるという方法もありますけど、それだと二度手間になって大変です。

今後可能性があるのは、文字情報を複製するという方法です。最終的にハードコピーにはなるとしても、印刷されている原本からコピーをとるのではなく、印刷されている文字をデータ化しちゃえばいい。そういう方向にたぶん進むと思います。いまだつたらOCRを使って文字をデータ化できます。データ化した本は、コピーはとらずにデータから直接プリントアウトする、というのが一つの方法だと思ひます。

全ての図書館が全ての図書をデータ化するの大変だから、その作業は一方所でやればいい。データの管理は、国立国会図書館などの、図書館のさらに上位機構がやればいい。これは半ば出版みたいなものだから、法律上難しいと思ひますけど、

これからはそういう作業が必要になるんじゃないかと思ひます。古い本はともかくとして、これから出る新しい本に関しては今後それが義務づけられてもいいんじゃないかと思ひます。たとえば、ポット出版で本を出したら、出版と同時にその文字データを国立国会図書館に提供するとかね。そうすれば、図書館側でいちいち読みとらなくても済みますからね。

このようにして情報を電子化していくと、ある雑誌のある図書館が物理的に収蔵しているということにほとんど意味がなくなつてきます。たとえば、必要な専門雑誌の巻から何巻までのCD-ROMを買つてくれればいい。買つてこなくても、どこがこのデータベースにあるということが分かつていけば、そこにつなげればいい。そうなつてくると最終的には図書館という形態が、ネットワークの中へ解消していくんじゃないかな。接続コストなどの兼ね合いはありますけどもね。

もう一つは、電子化されるのは本に限らないということです。本という形で出版するというには五百年の歴史があつて、印刷するということ

複製方法に馴染むものだったわけですよ。ただ、本の歴史は印刷の歴史より古い。印刷の前に写本の時代があるんです。大事なものは写本し、それほど大事でないものは、ノートという形で複製したわけです。印刷の時代になつても印刷のコストが高かつたので、印刷するほどのものでもないものや数十人の知的サークルの中で流通すればよいようなものは、講義という形でノートをとつて写本した。最近の講義はめっちゃめちゃですが、大学ノートとペンというものが生きていた時代には、私も大学入学当時にローマ法学の講義で感じましたが、ゆつくりしゃべつていくんです。初めはなぜそんなにゆつくり話すのか分からなかつたんですけど、要するにそれを全部ノートに書き取れという意味だったんです。そうすると講義の自身は、早口な私がしゃべつた場合の十分の一ぐらいしかないわけですが、考え抜かれたというか、去年も同じだったというか、ノートに書くべきことを読み上げていくわけ。学生がみんなそれを筆記

して、授業が終わると本が何ページか出来ている。これが講義の古典的形態で、印刷じゃないけど本が複製されている。

時代時代によつて知識の伝達に制限がありますが、電子的方法は大変に有用なものです。本になる前の形のもの。音声情報、あるいは画像情報。そういうものも、本と同じように複製して収蔵することが出来ます。一つの完結した形で、ある知識やメッセージを伝えているものであれば、複製、収蔵ができます。

実際に私の授業を撮影してみました。映像は文字データに比べて千倍ぐらいデータの幅をとります。処理スピードがかなり速すぎたり、コストがかかりすぎたり、場所をとるすぎたりして、今のパソコンで処理するのは無理です。かろうじて写真で数枚処理できたりしますが、ビデオや講義のように動いているものをそのものの形で収蔵させようとする、まだ無理です。無理ですけど、たかだか千倍ですから、三年で十倍だとすれば、まあ十年もすればこの千倍は縮まってしまうだろうとも言える。そうなれば図書館は、画像情報をそのまま収蔵するものになるかも知れない。

そうすると、大学図書館に何を収蔵すればいいかということに関して、考え方を変えなければいけないと思う。私が一番重要だと思ひるのは講義です。講義は、学生に直接話をする必要上、小さな単位、数百人の規模でやっています。

もし講義が電子化されて、反復して聴けたり、自由に聴けたり、同時に大勢で聴けたりするようになれば、いわばビデオ・オン・デマンドの形で受講者が中心になつて聴くようになれば、これだけ沢山の大学教員はいりません。複製できるということは供給力を増やせるということ、需要が一定だとすれば供給元は削減できます。そうするとみんな暇になるから働かなくてよくなります。

教育の内実は、教える本人のアイデアを語っている以上に、その時代の共通知識を話している部分が多いんです。それは高等教育、大学の教育であつても変わりません。

共通する部分を話しているのであれば、だれの講義を聴いても同じです。それならば、話が分かりやすく、教え方の上手な先生のを聴きたいと思ひます。本人のアイデアを話しているという部分は学生の個

性ということになるので、学生にもあの学者の話を聴きたい、という希望があるかもしれない。そうした場合に学生の選択の余地が出てきて当然だし、それは尊重されるべきです。その結果、自分の考えをしゃべつておらず、教え方も下手な教員の授業はだれも聴かないということになります。

そうすると、カラオケが登場したあと、流しのギターの歌手が全滅したのと同じことが起こつてくる。カラオケソフトと同じように、講義のソフトが、標準化・規格化されて商品化されるでしょう。そしてそれをストックして持つことができることが、大学図書館の重要な機能の一つになるのではないでしょう。

もう一つは、データが時間を越えていく形式ですね。図書であれば、図書を物理的に格納している建物としての、図書館が必要です。書庫が中心で閲覧室があり、カードボックスがあり、司書の人がある。これが今までの図書館であつたと思うんですが、もしそれが電子的なデータであれば、物理的に格納しておく必要はありません。閲覧室や何かをつくっておく必要はないです。司書機能、データ処理は必要かも知れませ

んが、それはソフトハウスとかでやればよい。物理的にある場所に建っている必要ありません。こういう方向に変化していくんじゃないでしょうか。

たとえば、ビデオレンタル屋さん
は町のあちこちにありませう。なぜあちこちにあるかというと、借りに行くのに歩いて十分とかいう制限距離があるからです。もしこれがオン・デマンドになったら、レンタル屋さんは全滅するわけです。データが要求される形によって、あちこちにあるか、一時間の距離に一箇所あるか、どこにもなくなってしまうかが決まってくると思います。

そこで重要なのは端末です。高速で、すばやく、大量のデータを閲覧しながら取り出すことが出来る端末が必要です。そういう端末がそろそろ出ると、私は思います。

これがバーチャル図書館というものの一つのあり方なの。そうすると図書館は、ネットワークの中に解消されていくんだけど、それを維持管理しデータを更新し、誰の要求にも

るんですね。電子化というものは、その物理的な制約をなくすという方向に働きます。

知識は公共のもの、みんなのもの
です。たとえば、だれかが考えたアイデアというものは、そのだれかのものではなくて、みんなを使うものなんです。ピタゴラスの定理は、ピタゴラスが考えたことになってるでしょう。でも、「私が考えたことだから他の人が考えちゃいけない」なんてピタゴラスは言いません。ピタゴラスの定理を使っているから、あなたが住んでいる家も、『ず・ぼん』を刷る印刷機も、動いているわけです。それと同じことで、公共の知識は全部無料で公開されています。著作権というものもあるけれど、それはアイデアのごく一部を保護しているだけなんです。もつとも基本的なアイデア

応える形に維持しておく。これが図書館業務の大事な役割になって、それに税金を使うことになるでしょう。一方、従来の図書館もクラシックな人達のために残しておいて、従来の本も閲覧出来るようにしておいてもいいですね。

最近の学術雑誌などは、コストの関係で実際には印刷されずに、電子的に出版されるだけの雑誌が増えてきています。それは、e-mailのようなもので定期的に届きます。学会員が五〇〇人だとか一〇〇〇人で、印刷のコストを削減しようと思えば、賢明なやり方ですね。学術雑誌はともと採算を取るのがとても厳しいものですから、真つ先が変わっていくんです。商業的なものはそれほどではないかも知れませんが、徐々にそういう方向に動いていくでしょう。

なぜ図書館は開かれるべきなのか

図書館は無料でだれにでも開放さ

は公共のものだし、著作権も保護期間が過ぎちゃえば公共のものなんです。そうやってお互いに助け合っているわけです。図書館もその一部なんです。図書は、買えば読む権利が自分にあるけれど、書いてある中身は公共のもんです。

このことは、絵画の例を考えてみると、わかりやすいかも知れません。あなたが大金持ちだったとしましょう。ゴッホの『ひまわり』が世界中に何枚あるか知らないけど、みんな買集めてきて、居間に飾ったとします。そしてあなたは性格異常者なので、自分以外のものがゴッホの『ひまわり』を観るのはけしからんとまって、火をつけて燃やしてしまつた。私有財産には使用・収益・処分の権利があるでしょう。処分というのは破壊を含みます。民法上これは問

れているべきです。それは本を読む価値のある頭脳を持った人間が、必ずしもお金を持つていないからです。貧乏人でも、どんな経済条件であつても、意志があれば本を読んで勉強が出来る。これが図書館の一番の基本ですね。だから無料になるわけです。ここで公平を確保する。そのコストを社会が負担して、勉強しようという意欲と能力のある人がその利益を享受する。ひいてはこれが社会・公共のためなのです。

それは、亡命してきたマルクスやレヴィ・ストロースが、快く迎え入れられたのと同じです。身分証明書ぐらひはみせて欲しい気がするけど、原則だれにでも、知能のある限り、積極的に図書館を破壊しない限り、利用を認めていいと思う。大学図書館も同じです。私は、大学が学生を選んでいることに反対して、だれでも学生になつていいと思つていますから、当然、だれでも図書館を使つていいと思います。相互貸借のところでも述べたように、今は貸出制限というのがあつて、とても不便

題ありませんが、道徳的、倫理的にはどうでしょう。大変な非難を受けます。読者の中で、そういうことを喜ぶ人はいないと思う。権利だからよくやったなんて言いません。ゴッホの『ひまわり』を買つてきたというのは、自分の家ではばらばら大事に観て下さいという意味であつて、この絵はもはや人類のものである、決してあなたのもんではありませんよということを含んでいるんです。だからあんなに高い値段がついているわけです。みんなが観るであろうから、それだけ大事にして下さいという意味であつて高い値段がついているんです。つまりそれは、公共のものなんです。

本の場合も、仮にあなたがだれかの本を全部買集めて、みんな火をつけてしまつて同じことになりま

です。

ただし無制限に利用を認めると、司書の人が大変になります。コピーで本が傷むという現実もあります。しかしこれは過渡的な問題、兼ね合いの問題なので、たとえばもうポロポロになつていて専門雑誌なんかを、だれにでもコピーさせるのは危ないですよ。日本に一冊しかないかもしれないんだから途中でなくなつちやつたら困ります。そういう点は考えるべきかもしれないけど、それはやっぱり兼ね合いの問題です。原則として、公開するために所蔵しているのですから、その精神においては、だれにでも利用を認めるべきです。

電子メディア化は、その敷居を下げてデータの損耗も防ぐという、大変画期的な効果をもたらす。それは図書館にとつてもいいことです。さつき言つたような兼ね合いの問題を考えなくて済むようにしてくれると思うんです。図書館があちこちにある。大学があちこちにある。これはみんな物理的な制約に基づいてい

す。図書館はそういうことが出来ないように保存しておく。破壊されないように守つておくところなんです。破壊の元凶が学生であるところ、学生以外の人であるところ、か、やむなく利用を制限するということで、論理はあつてもいい。だけど大事なものであるから、公共のものだから守つていけるんです。だとしたら利益を得るのはすべての人々であるはずだし、すべての人である以上、本来だれでも閲覧できるはずのものなんです。そういう権利は当然のこととして世界中の人が、世界中の図書館に対して要求できることと思つています。